

なかがわ

那珂川町郷土史研究会



裂田溝22

倉掛堰周辺

ちに待った疎水百選認定証「平成18年3月」が交付されたときの喜びが大きかったことなど…。この本の中には、随所に裂田溝についての記述が見られます。那珂川町は、平成8年にも「肥前・筑前街道―脊振坂越え」が文化庁の「歴史の道百選」の認定を受けています。二つの歴史遺産の認定を持つ町は、全国にも数少ないのではないのでしょうか。あらためて「書紀の里」づくりに知恵を絞り、何ができるかをみんなで考えていきたいと思っています。

裂田溝の大改修工事も4年目に入り、いよいよ最終年度を迎えました。現在、小柳地区の工事が行われ、八田橋下流は遊歩道や親水公園などの工事が進められています。

湯浅殿橋下は、大樹が水辺にかぶさるように茂っています。これより先は前方が一面明るくなり、南側の田の土手は右から左へと大きく張り出し、溝もまた寄り添うようにゆったりと流れを変えています。この田の地名を「板井崎」といいます。こ

こは、平成14年度に発掘調査が行われました。その結果、水路の跡が発見され、見つかった「木杭」から年代は14世紀前半のものであることが分かりました。そのほかにも縄文式

土器や土師器、陶磁器などが出土しました。

田には、排水用の「落水口」が二カ所あります。稲刈りが終わるとすぐに耕運機が活動を始め、あつという間に田は野菜畑へと変身します。土起こしが始まると7、8羽のシラサギが飛んできて、行列よろしく耕運機の動きに合わせて、土の中から小さなカエルなどをついばんでいるのどかな風景が広がります。見事な野菜畑に変わった半年間は、季節の野菜が次々に育ちます。肥沃な土地は溝の水の恩恵をたっぷり受けて、葉の緑もみずみずしい、栄養たっぷりの野菜が育つのだそうです。江戸時代に書かれた「筑前続風土記・土産考」に、名産として「那珂郡山田村産の牛蒡も美味」と記されています。小柳の農家の人は「山田のゴボウを市場に持っていくと、一番先に売れていた」と話していました。

板井崎の田の東側は、薬師川が流れています。薬師川の源流は不入道と長谷林道の境辺りで、寺山田の集落の中を流れ、途中の田へ水を送りながら裂田溝に突き当たる形で合流します。この合流点に「取水口⑧倉掛堰」があり、7本の石柱が立っています。ここでせき止められた水

は、側にあるハンドル式の巻き上げで北側の田へ取水されます。7、8月の満水時に大雨が降ると、土砂を伴った薬師川の水は一挙に流れ下り、道路を越えて北側の田へあふれ出ます。近年は関係者の話し合いで、予水を流す側溝の改良が行われています。薬師川と溝が合流するT字形の角に、通称「二軒屋」と呼ばれている家があり、薬師川に面した勝手口側に「汲ん場」があります。これまで倉掛堰のすぐ下流に「僧原橋」が架かっていましたが、この橋は「一軒家」の家の塀の際を通る道と直角であるため、見通しが悪く通行に不便でした。そこで、10 m下流に新しい橋は幅4 mで、道と直線につながり、通りやすくなったと喜ばれています。この道の先に、町教育委員会が設置した「岩門城跡登山口」の案内板が立っています。

次号は、横枕堰周辺を紹介します。

先日号で紹介した「風車井堰」は、「風車井堰」の誤りでした。お詫びして、訂正いたします。



薬師川に一つだけある堰



薬師川に一つだけの汲ん場



14世紀前半の水路跡と木杭



- コースメモ

 - 57. 橋 - 17 (湯浅殿橋)
 - 58. 落水口 (上流側)
 - 59. 落水口 (下流側)
 - 60. 薬師川
 - 61. 取水口 - ⑧ (倉掛堰)
 - 62. 橋 - 18 (新設の橋)

次号へ
裂田溝標柱
- 史跡メモ

 - 岩門城跡登山口

百選の溝がさそうかわせみの羽の縁青水面にうつるともえ



裂田溝に飛来するカワセミ



薬師川と裂田溝の合流点、倉掛堰



新設された橋／新しい橋の名前が考えられています



僧原橋／永年のお役目で苦勞さまでした